



ご挨拶

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第三十九号

2023/11/02 発行

題字：高橋弘美

先日一年ぶりに東京へ行って戻ってきたら、水の味がまったく違うことに気がついた。これまであまり気にしたことがなかったが、今回はなぜか水を飲んだとたん、家に帰ってきたのだと思った。

さんざんニュースになっているので皆さんご存じと思うが、秋田県では今年、熊がやけに人里へ降りてきてさまざまな被害を起こしている。我が家の近くでも熊が出没して、近所の畑に大きな足跡をつけたり、警察が目撃情報のあったあたりを見まわりに来たりしている。

今年はどうも山で深刻な食糧難が発生しているらしくて、熊の好物であるブナやナラの実がほとんどないようである。そのために貴重な餌場をみんなで奪いあうことになり、成熟し経験を積んだ強い熊が餌場をみんな自分のものにしてしまう。若いや子どもを連れた母親はその争いに敗れて山から押し出され、仕方なく人里へ出てくることになるが、どの世界でも割を食うのは若者と子どものいる母親と決まっているようである。わたしはそんな連中を憐れに思うが、それがこの世の自然の摂理であることも、まぎれもない事実なのである。

今号の内容

熊と狂女

熊と狂女

近所に少し頭のぼけたばあさんがいる。その人は同じ話をレコードのようにくり返すが、そのばあさんの家は集落の共同墓地の近くにあつて、父は最近墓の杉の木を始末した関係で、その後片づけのために連日墓へ行っている。それでそのばあさんと日ごとに顔を合わせる羽目になるが、最近のばあさんの話題といえば、ずっと熊の話だという。うちの畑に熊がこんな大きな足跡をつけて行きおつた、うちの娘の家のそばにもこんなに大きな熊が出て、たいへんな思いをしたそうだ、その娘というのが……と話はしだいにばあさんの記憶と妄想のない交ぜになつたようなものへ発展してゆき、いつまでも終わらないのである。

ばあさんの家の畑に熊が足跡をつけていったのは事実で、娘の家のそばに熊が出たのも事実らしいが、どうやらばあさんにとつてその出来事は、相当に衝撃的なことだったらしい。記憶が薄れ、ショックが薄れるまで、ばあさんはおそらくその話をくり返すだろうと父は云つた。以前には、嫁

いだ娘とどこかにいる息子とその孫の非常に錯綜した、ばあさんだけがわかつているような話をずっとしていたのだが（これはわたしも聞かされたので知っている）、いまはそんなことよりも熊出現の衝撃がばあさんの感情を昂ぶらせ、その話をせずにいられないようになっていたのである。

そのばあさんはいつも家の前の畑で作業していて、枯れた花やもう収穫が終わってしまった野菜の片づけに追われている。枯れた花やら野菜の茎やらがある程度たまると、ばあさんはそれを猫車に積みこんで、えいやと気合いを入れて車を持ち上げ、ゆるゆると押して家の裏手にあるお稲荷様のお堂へ向かう。猫車を押したまま、朱色の剥げかけた鳥居をくぐり、小さなお堂の脇へ車の中身をぶちまける。

そのあたりはばあさんの家の土地で、一家のゴミ捨て場のようになっている。もちろん、捨てるのは農作業で出たものばかりで、家庭ゴミや瓶やプラスチックのような始末に困るものを捨てはしないが、はじめてその光景を見たときには、なにか畏敬の念のような不思議な気持ちをおぼえたものである。鳥居をくぐり、お堂の脇に猫車のゴミを捨てる、その動作はいかにも手慣れていて、ばあさんが長年この作業をやりつけているのがわかるが、しかし鳥居の中、お堂の脇にゴミを捨てるとはなかなか勇氣のいることではないか。そんな

ものはくそ食らえだと思つていような人や若い世代ならともかく、その人は年とつたばあさんで、特に迷信深いわけでもなからうが、さりとして多少の信心にも縁がない世界で生きてきた人とも思えない。祖母とあまり歳が違わないから、キツネ憑きだのタヌキに化かされたのといった騒ぎを見聞きしたこともあろうし、神仏に対して幾ばくかの畏怖があるのが標準であろう。

ところがそのばあさんは、軽々と鳥居をまたいで、お堂の脇にゴミを捨てる。これはいかなることかと考えたのだが、そのばあさんの慣れた手つきや、鳥居をまたぐときの、なんとはなしに誇らしげな態度を見ていたら、そこはばあさんの家の土地なのだ、そうであつてみれば、この場所にゴミを捨てるのはばあさんの特権であり、何ものにも代えがたい権利であるのに違いないのだ、ななつたつて、この土地はばあさんのものなのだからと、ふと納得したことだった。神も仏も関係ない、ここはおれの家の土地なのだ。おれの屋敷なのだ。

そのおれの屋敷に熊が出たことは、どれほどばあさんを驚かし、脅かしたことだろう。人里にこんな熊が出たことは、ばあさんの生涯でもはじめてのことだろうと思う。もちろん、このあたりにはいろいろな生き物が住んでいる。カモシカもリスもキツネもタヌキもムジナもいる。だがそう

したものは、都会の人が田舎と聞いて想像するほどには人里に出てこない。もつと山奥との境にあるような土地へ行けば、いくらか目にする機会もあり、現にそうした境界の地に住んでいた同級生の家の近くには、ときどきキツネが出て、その同級生自身、どこかキツネに憑かれてでもいるのではないかと思われるような不思議な子だった。もつと山奥の、沢のすぐそばに住んでいた男の子は、いつも能面の翁のように目尻を垂らして機嫌よくにこにこ笑っていて、小学校の六年間を通して、その子の怒ったところを一度も見たことがない。

人里と山との境界の感覚を、少しも感じたことのない人にわかってもらうのは難しいが、そうした境界は昔から、確かに存在していた。それを超えれば、そこはもう里とは別の世界であって、人もなにか人ならざる性質を帯びてくる。そういう感覚がわたしたちの生活の中に確かにあった。小学校のとき、いくつか下の学年に、ほんとうは支援学校へ行かねばならないような知的障害をもつた女の子がいたが、親の方針とかで普通学級にいて、担任の若い男の先生が好きで、なにかあると服を脱ぎだして自分の裸を見せようとするのだった。その子もまた、かなり山のほうに住んでいた女の子である。小学校からの帰り道はだいたい東西南北の四方向に分かれるのだが、山奥のほうへ

行く道を使う子たちは、どうも少し変わった子が多かったように思う。その道は奥へ行くほどなにか近づいてくる山の景観がものすごく、わたしなど友だちの家へ行くのにも、怖くてしようがなかったものである。

それから比べると、わたしの家など平穏なものだ。山は近いが、低くてたいしたことのない山で、その山を超えればすぐ隣町なので、山の中に道があるし、昔から人の往来も盛んだったと見える。そこは境界の地とはあまり見なされていなかった。その山は聖なるおそるべき山というより、人里という景観の中の一部だったし、いまもそうであるように思う。それは山脈に連なるような先のしれない深い山とは違っている。それは御しやすく、まだ人の顔をしている。山でありながら、人の心があって人の顔をしている。それは聖なるものと俗なるものの、両方の性質を帯びてその中間にまたがっている。

そんな山から熊が降りてきたというのだから、近所のばあさんが仰天して調子が狂ってしまったのも致し方ないことである。その山は得体の知れない山ではなくて、もうすっかり人が手懐けてしまったと思いきや、ほとんど人里の一部のような山で、その山が突然、里で悪さをするような獣を産もうとは、ばあさん考えたこともなかったに違いない。わたしたちはついこのあ

いだまで、無邪気に山と里とを分け、自分の都合のいいように解釈できる世界に住んでいた。人がそうと思っていることは当然そうであるというよな、なにかのどかでのんきな世界に我々は住んでいた。人の活動は活発だった。人は生まれ増えようとしていて、食糧を確保するためにみな懸命に働いていた。そこに対立と、不思議な調和とがあった。だがいまや人の活動は停滞し、人口は減りはじめた。人は山を制するのではなく、山に脅かされるものになりつつある。

わたしの市では、今年だけでもう八〇頭以上の熊が駆除されているそうである。そのほとんどが若い熊か子連れの母親である。山での生存競争に敗れ、里へ出てくることを余儀なくされた熊たちである。わたしはこの連中がたまらなくあわれなように思うが、しかし向こうが戦いならこっちはだって戦いである。われわれと熊とは互いの生存をかけて戦わねばならない。そんなことは別にしなくないのだが、わたしが生きるか、熊が生きるか、人間の共同体が勝つか熊が勝つか、どうやらそう遠くないうちに、その瀬戸際に立たされそうにも思う。

そんなことを考えながら散歩の準備をしていてふと、銃を持つとうかと思った。それがわたしたちに可能な最後の、最大の防衛手段であるように

思った。人は銃を持っているかぎり、獣に勝てる。熊もシカもイノシシも、いかなる獣もくだせるようになる。世の中がこうなってしまうては、銃が最後の望みではないか。それが唯一の手段ではなからうか。銃を発明した人は、なんとというえらいものを発明したのだろう。その人は永久に記憶されるに値する。

わたしがこんなことを考えるほど、われわれ里の人間は、この熊の異常出没ともいうべき事態におびえていた。口で大げさに云いたてるのではないが、自らの領域を侵食されつつあるという恐怖が、そしてそれに勝てそうにないという漠然とした予感が、密かわたしたちを覆ってしまおうとしていた。もはやいつどこで熊に出くわすかわからない。それが人々の共通認識になりつつあった。

わたしにしても、このごろでは散歩に出るのにほとんど命がけの気がする。わが散歩コースにも、どうやら熊が出るらしい。先だつていつものように散歩していたら、向こうからトラックが走ってきてわたしの横で停まり、日に焼けたおやじさんが窓から顔を出して、最前あの向こうの橋のあたりに警察車両やトラックが何台も来ていた、橋が壊れたとか、なにか落ちたとかいふ様子もないが、なにか知らないかと訊ねられ、ふたりであれこれ話しあった結果、やはり熊であろうとの結論に達した。わたしの散歩コースは山沿いを歩く。山の

手前に川が流れてはいるが、橋が何カ所も渡してあるので、熊など容易に川を越えてこちらへ来ることができるだろうと思われた。

母はその話を聞いてすっかり不安にとり憑かれてしまい、わたしに決して山のほうへ行つてはならぬ、散歩の際にはよく気をつけて町中を歩くようにしなければならぬと云った。父までがなにか遠くを見るような目をして、四十年も育てて熊にやられて死んだのでは、ちよつとどうにもならぬというようなことを云った。

いまや散歩のあいだじゅうわたしの体は緊張し、ほんのわずかな物音でも熊ではないかとおびえ出す。どこで熊に出くわすかわからないから鈴を持つてと母がしきりに云うので、わたしは前日に百円ショップで小さな鈴を買ってきた。自転車用品の売り場で見つけた、安っぽいビニールのストラップの先に小さな鈴がついた、ふたつセットの品である。わたしはこの日それを両手の人差し指にはめて、さかんに振りながら散歩に出た。鈴は乾いた、なんともいえない涼やかな澄んだ音を、あたりに響かせた。

こんなにおびえていながら、しかしわたしは母の忠告を無視して、父の心情も無視して、相変わらず山沿いを散歩している。はじめの数日は、一応気をつけて別の道を歩いたりしてみたのだが、例年のように冬になる前に渡ってきた白鳥のやつ

が、わたしのその警戒をとがめるようにやたらと山沿いの田んぼで羽ばたきするので、わたしもなんだか気がとがめて、結局いつもの散歩コースへ戻ってしまった。白鳥どもはうれしそうに鳴くし、わたしが歩いている横を歩きに帰りにぐるぐる飛ばしで、わたしはどうもすまないことをしたと思ったものである。わが散歩はすでに、白鳥どもの毎年の渡りの中に組みこまれていたので、あんなんだかのろろしたやつが、毎日判で押したように決まった時間に餌場のあたりをうろつかないでは、連中もなにか物足りないような、妙な気持ちがるらしいのである。こののんきで明るい連中を裏切るようなことは、やはりわたしにはできないのだった。

白鳥の甲高い鳴き声を聞き、図体の大きいのがバタバタとせわしく羽ばたいているのや、まだ灰色の産毛に包まれた子どもが不器用に田んぼを歩いているのを横目に見ながら、わたしは山沿いを歩いた。このままこの土地で暮らすなら、将来銃を持つべきかどうか、というような考えが、相変わらずわたしの頭の大部分を占めていた。このあたりの集落はもう十年もすれば、人口がほとんど半減しているだろう。空き家も増えるし、耕作放棄地も増えるに違いない。そのときわれわれにどんな自衛の手段が残されているか。山から熊が降りてきて、人の家にまで上がりこんでくるよう

なことが常態化したならば、いったい人間に、ほかのどんな防衛手段が残されているか。

指先につけた鈴の音が、シャンシャンとあたりに響きわたっていた。最近では、道がとりわけ山に近づくあたりと、熊が出たらしい橋の架かっているあたりで、わたしは歌うことにしていた。白鳥に義理立てして散歩コースを変えないことにしてしまっただから、どうしたら熊と鉢合わせをせずにすむか考えねばならなかった。そのとき手元にはまだ鈴がなくて、いろいろ考えた末にふと思いついた方法だが、さてなにを歌うかということとでしばらく考えこんでしまった。

歌というものは、なんの準備もなしにさあ歌えと云われても歌えないものである。日ごろから歌い慣れている人や、歌う機会の多くある人は別だろうが、わたしのように歌に触れる機会もなければ歌う習慣もないのでは、歌と云われてもその肝心の歌が出てこない。長いこと思索した末に、結局出てきたのは教会で歌われる歌だった。日曜の式典のはじめのほうで歌われる、第一アンティフォンと呼ばれる歌である（アンティフォンとは合唱隊をふたつに分けて交互に歌う形式のことで、非常に古い起源をもつ）。

我が魂や、主を讃め揚げよ
主や爾は崇め讃めらる

我が魂や、主を讃め揚げよ

我が心や、その聖なる名を讃め揚げよ

主や爾は崇め讃めらる

彼がことごとくの恩を忘るるなかれ

彼は爾がすべての不法を許し

爾がすべての病を癒す

爾の命を滅びより救い

憐れみと恵みを爾に被らせ

善きものにて爾の望みに飽かしむ

爾が若返ること驚の如く……

わたしはこうした歌を、山にもつとも近いところを通るとき歌った。この日はそれに、新しくわたしの指先で揺れる鈴の音が加わった。わたしは両手を挙げ、鈴を振りながら歩いていった。そのほうが大きな音がする気がしたのである。鈴の音とともに歌っていてふと、なんだわたしは神に呼びかける巫女のようなではないかと思っただ。「巫」という字は、人が神と交信するための呪具を両手に持っている図であるという。わたしはこうして鈴を鳴らし、歌いながら、熊ではなくて神に呼びかけているのではないか。いや熊が実は神なのかしら。いずれにしても、わたしはいつか実際にこうして神を呼び、歌い踊って歩いたことがなかったか。わたしはかつて、もつとずっと古い時代に、

そうした人生を送ったことがなかったか。

そのときわたしの頭にふと、能にたびたび描かれる狂女の姿が浮かんできた。たとえば『隅田川』の、我が子を人買いにさらわれて心乱れ、気が狂ってしまった女。子どもと生き別れ、その子に会いたい一心で正気を失いながらも念仏を唱える『百万』。恋した少将に焦がれるあまり、気が狂ってあちこちをさまよい歩く『班女』。さる皇子を慕い、気も狂ってその行列の前に飛び出す女、照日の前を描いた『花筐』。そしてしまいに男装の舞妓、白拍子の姿が浮かび、わたしの目の前を、物狂おしく舞っていった。

ああどうもあれはわたし自身ではなかったか、あのように気も狂い、寄る辺もなく、昼も夜も知らずに諸国を踊り歩き、さまよい歩いてきた、あれはわたしではなかったか。両手に鈴を打ち鳴らし、手を上げたり下げたり、回ったりつんのめったり、よろけて尻餅をついたり、まったく無様な踊りの体をなしていない踊りを踊りつつ、旋律のあるようなないような妙な歌を口ずさみ、鈴をさかんに振って、あれは気狂いだよと人に笑われ指さされるような、そういう女であったことが、わたしの過去になかったか。どうもあったように思うのだ。

そのときのわたしはアイスキュロスの描くカサンドラさながらだったろう。アポロン神に愛され、

その恋人となる代わりに予言の能力を賜ったが、その力を授かったとたん、アポロンが自分を捨てる未来が見えてしまったために彼を拒絶し、怒ったアポロンに今度は「誰も彼女の予言を信じない」という呪いをかけられた、あのあわれな女である。

そのあわれな女予言者は、白拍子は、狂女は、わたし自身は、鈴を振り、妙な踊りを踊りながら、甲高い声で歌いつつ恍惚として過ぎていった。その女は人であって人でなく、もはや人の領域に魂を置いていなかった。あの女は森羅万象と一体であった。あの女はすべてであった。あの女自身が世界であり、あの女自身が神であった。今も昔も、そのようなものを人はもの狂いと見なす。その女はいま通り過ぎざまに、わたしをあざ笑った。恐怖に駆られて銃のことなど考えているわたしを、嘲りをこめた目で見ていった。そしてその女の目を見た瞬間、わたしもまたわけもなくおのれを恥じたのである。

女は笑いながら鈴を振り、歌い踊って過ぎていった。そのときわたしはわたしの裏側を、世界の裏側を、期せずして見てしまったような気がした。そして空恐ろしさと同時に、不思議な、およそ自分にあるとは思ってもよらなかったものが、自分のうちで自分を呼んでいるのを感じた。

わたしは歩いた。鈴を振り、歌いながら山際を歩いた。わたしはその女であって、同時にわたし

自身であった。恐怖は消えていなかったが、それとわたしとのあいだにはいま不思議な距離があった。わたしにはわかっていた。自分が死ぬか熊が死ぬか、そんなことはどちらでもよく、どちらもわたしには、そして熊にも、どうにもできぬことだった。わたしが生きるのが摂理ならわたしが生きる。熊が生きるのが摂理なら、自然がそのときを殺して生きる。日々起きているのはそのようなことだ。そしてわたしの存在は永遠だ。その熊の存在もまた。

わたしは歌い、声高らかに歌った。

「爾の命を滅びより救い、憐れみと恵みを爾に被らせ……」

憐れみとはなにか、恵みとはなにか。それはいまここにあり、すべてのものの上に注がれているが、それは奇妙に透き通って冷ややかだ。それはものの生死に関係しない。その憐れみはそのようなものではない。殺されるわたしかあるいは熊か、そのどちらの上にも注がれており、あの白鳥どもの上にも注がれている。それは温かくなく、救いではなく、美でもなく恩寵でもなく、ただこの晩秋の午後遅い時間の日差しのようにである。すべてのものの上に降り注ぐが、なにも温めず、いかなる力をそこに注ぎもしない。それはただあり、ただすべてのものの上にある。踊り狂う狂女の上に

も、それをあざ笑う者の上にも、熊の上にも、あらゆる生き物の上にも。

ところでわたしに降される神託はわたしのものである。現代に生きるわたしは、カサンドラの時代のように、人に神託を宣べる義務を有していない。神託のほうでもそのような扱いを受けるいわれはないと云っている。わたしの神託はわたしのように他者に対して冷ややかであるし、わたしに神託を宣べる者、ないし真理と人が呼ぶものを示す者も、わたしのように冷ややかである。

わたしはかつてもつと温かい唯一者を求めて奮闘したものであるが、そのようなものはわたしの内部にあるだけで、外の世界に遍在しているものではなかった。正確に云えば、しているがその仕方が違っていった。それは人間のありきたりの形式とは違った形式でそこにあるので、しかしつきつめてゆけばひとつになるのだが、ともかく真理は人が思うように温かいのではなく人が思うように慈悲深いのではない。その温かさや慈悲深さを人間の基盤に据えることができるなら、この世界は非常に大きく変わるに違いないが、そんな日が来ようとは思えない。

最近わたしは、お釈迦様がその前世において、飢えた虎に進んで我が身を投げ出し、食い殺されてしまったという話の意味を考える。これの意味

が真実にわかるのはこの世の裏側を見た人だけである。わたしの常の意識は、熊に襲われて殺されるなどいやだと相変わらず思っているし、相変わらず散歩のたびに恐怖におののいている。だがわたしのなかの別のわたしは、熊に襲われるかわたしが生きるかはわたしの決める問題でないことを知っている。そしてそのようなことを知っていないながら、わたしがもしも恐れをなして、山辺を散歩して歩くのをとりやめたとすれば、そんなことはわたし自身と山とこの土地に対する手ひどい裏切りになることを知っている。ここはわたしの生まれ土地でありわたしの土地である。白鳥がバタバタ怒るのも当たり前である。

だがともかくも、熊の出没するおかげで思いがけなくこんな体験をする羽目になった。あまりしたくなかったが、どうも年々わたしは自分に対する自分の権利のようなものを放棄するように迫られている。ときどき、自分自身がほとんど自分のものでないような気がする。自分自身があるが、自分のなにもかも自分の自由にならないとしたら、わたしというものはいったいどこにその根をもっているのか、つい考えてしまう。しかしそんなことを考えるのはわたしのような愚図のすることではなく、もつと頭のいい連中のすることに違いない。

わたしに求められているのは、おそらくただ感じることに、それもほとんど狂女の忘我に等しい真

空の中で感じることである。その真空がおそらく神の座なのだが、なぜこの神という御仁がわたしをその座に同席させてくれるのか、そしてなぜそこから世界を見るように要求するのか、わたしには相変わらず少しもわからないでいる。もつとも、こんなことに別に理由などないに違いないのだが。

二〇二三年十一月二日

水澤雪下

<https://mjibms.com/>



陳崇光「馮媛當熊圖」

今号を書いている途中で、たまたま面白い絵を見つけた。この「馮媛當熊圖」は清代後期の作品であるが、中国に伝わる次の物語を題材としたものである。

前漢の元帝（前74～前33）はある日、後宮の女性たちとともに、檻の中で猛獣どうしを戦わせる見世物を見物していた。すると突然、檻の中から熊が飛び出し、元帝たちがいる宮殿によじ登ろうとした。女性たちは恐怖のあまり逃げ出してしまったが、ひとり馮媛という女だけが熊の前に立ちどまった。

幸い、熊は護衛の役人たちにとり押さえられたが、元帝は馮媛に対し、なぜ恐れず立ち向かったのかと訊ねた。すると馮媛は、猛獣は人を襲えば立ちどまるもので、熊が陛下に近づこうとしたため、わたしが身を差しだしたのでと答えた。

それを聞いた元帝は馮媛を寵愛し、のちに「昭儀」という称号を与え、正式な后としたのである。

この話自体はまぎれもない美談であるが、やはりわたしとしては、あれこれ考えざるを得ない。